

「助けて！」が言えない

若年層のホームレス化

2008年秋のリーマンショックの影響による世界同時不況。格差社会の広がりによって増えてきた貧困層の中に若者の姿が多くなっています。ネットカフェ難民、やがて野宿者となる若者も少なくない状況です。産業の中心的労働力を担っているはずの若者たちが、なぜ巷に彷徨っているのでしょうか。NPO法人北九州ホームレス支援機構（以下、支援機構）に取材しました。

また、路上生活に陥った状態から支援機構に出会い、新しい生き方を模索する一人の青年に話を聞きました。

ホームレス問題を考える 10

野宿者の年齢層の変化

50〜60歳代が一番多かった野宿者の年代層が、最近少しずつ変化してきているという。これまで少なかった40歳代が多くなり、30歳代も見受けられるようになってきた。そして、ネットカフェやまんが喫茶、ファストフード店に寝泊りしている20〜30歳代の若者たちが急激に増えてきている。ホームレスという自覚はないが、今日の仕事が得られなければ、野宿しかないネットカフェ難民と言われる若者たちだ。

バブル崩壊後の20年間、新自由主義のもとに終身雇用制は崩壊した。企業は正規雇用を極力減らし派遣など非正規雇用によって、人件費を大幅に削減してきた。就職氷河期と言われた十数年前から多くの若者たちがフリーターや派遣社員として、企業に都合のよい不安定な就労を強いられている。その働き方は、企業や派遣会社の都合で駒のように動かされることが多い上に、業績が悪くなれば一番はじめに解雇される。このような差別化された働き方の中で、多くの若者が夢や希望を持ってなくなっている。このままの社会状況が続けば、ネットカフェで寝泊りして

いる若者たちの多くが野宿者にならざるを得ず、路上にあふれると支援機構は危惧している。

自己責任論がもたらした社会の歪み

急激な雇用の悪化で、就職先そのものが少なくなっており、まじめに働き安定した生活をしたと望んでも、働く場がない。個人ではどうにもならない社会状況にもかかわらず、失業状態にあることの自己責任を問われることは多い。派遣先の職場は、短かければ数ヶ月、長くても数年で替わる。企業への帰属意識は育たず、労働者としての権利も保障されることが少ない。また、若者たちの多くが、派遣という就労形態の中で人間関係をつくるのが困難となる傾向があるため、突然の解雇という経済的、精神的窮地に陥つても相談する人も場所もないのが現状だ。そうした状況にある多くの若者が、どうしても自分からず、ひたすら自分を責め、貶めてしまい「助けて！」という言葉すら発することができないでいる。自分で問題を解決し、責任を持った生き方をしていくことは大切なことだが、そのようにできないのが現実だ。

そうしようすは、若者だけではない。野宿者になつていく人の多くが、「どうにか生きていくから、役所の世話にはなりたくない」「自分の責任だからしかたがない」と言う。自立や自己責任など、これまでの社会がつくってきた価値観や社会の歪みが貧困に陥った人々をそのように思わせているのではない。

また、多くの若者たちは、人に甘えることは自立性を損なうからと、自分でなんとかしようという思いが強いようだ。だから、親や家族に今の姿を見せたくないという気持ちから連絡を取らないという。派遣先

の解雇で住む場所を失い、肉親への連絡も絶ち、自責の念に苦しむ若者たち。自己責任論はこうした状況を生み出している。

求められている 地域での助けあい

支援機構が最近支援したAさん(40歳代・男性)は、高齢の両親を介護しながら生活してきた。しかし、争ってばかりいる両親に我慢できなくなつて家を飛び出した。仕事は見つからず野宿するしかなくなつてしまった。Aさんは家族と暮らしていた時も、誰にどのようにならなかつたという。地域



家庭を持ち、子どもの親になりたいと思えるようになってきた

Kさん(30歳)

高校を中退し、フリーターに。2年間は正規雇用の経験があるが、23歳から2008年の12月まで、何度も派遣会社を替えながら自動車関係の仕事をしてきた。

派遣社員は言われたことをしていればいいから、職場の人間関係は気楽だったが、一緒に遊ぶ相手はいても、悩みを相談できる友人はいなかつた。給料はギャブルなどに使つてしまいいか月もたないことも多かつた。もちろん貯金もない。結婚したいとも思わなかつたし、家庭を持つ自信もなかつた。その瞬間が楽しければよかつた。

2008年の12月21日、派遣切りで寮を追い出された。所持金は6万円くらいしかなく、ともかく年を越さなければ仕事も探せないと思ひ、野宿とネットカフェやまんが喫茶で仕事が見つかるまでやり過ごそうと

考えた。ところが、野宿したその日に荷物を盗まれ一文無しになつてしまった。絶望で何も考えられず、4日間食べものを口にすることもなく、ぼんやりたずらんでいた時、支援機構の街頭募金活動をしているところに出会つた。メンバーの1人が手招きをしてくれて、吸い寄せられるように近づき状況を話した。もし、それがなかつたら、自分から近づくとは無かつたと思つた。その日から、自立支援住宅の集会所に寝泊りさせてもらえるようになり、その後、失業手当の手続きもできた。ともかくホッとしたというのが本音。それから、支援機構のボランティアをはじめた。その経験から、人のためになる仕事をしたいと考えるようになった。2級ホームヘルパーの資格を苦労して取得、現在就活中。

支援機構の人たちに出会つて、少しづつ人が信じられるようになってきた。考えてみれば、小さな頃から人を信じていなかったように思う。その上、機械相手の仕事ばかりしていたから、人の肌の温かさからも遠かつた。支援機構の人はみんな温かい。将来を考えることの大切さを熱く語ってくれた。10年先なんて、考えたこともなかつたけれど、今は、苦しい金銭管理を身につけて、家庭を持ちたいと思えるようになってきた。

ヘルパーの実習で、認知症のおばあさんの話を聞いていたら、「ありがとう」と言われた。自分でも人の役に立つことができると知つてうれしがつた。これからは、自分と同じような境遇に陥つていく人に出会つたら声をかけ、助けてくれるところがあることを伝えたい。同じ経験をした者にしか言えない言葉もあるはずだ。

も困つていく人がいれば、積極的に隣人に声をかけ助けあうことが必要だ。

支援機構は、定期的に夜回りをしている。公園などで野宿やテント生活をしている人を訪ねて、弁当や衣類などを配りながら、困つた時は連絡をしてもらえるように、手紙とテレホンカードを渡している。最近、ネットカフェやファストフード店なども訪ね、困つていような人がいたら連絡できるように、受付に名刺を置いてくる。若者たちに「助けて」と言えるところがあることを知らせるため



30歳代の野宿者に、声をかける支援機構のボランティアスタッフ